合科的な防災･減災教育の授業づくりへの挑戦
―自分で自分の命を守ることのできる児童の姿を目指して―

23A1002　岩崎 凌大

要旨

本研究の目的は，各教科等の防災･減災教育に関連する内容を合科的な単元として位置付けることで，「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」を目指した防災･減災教育実践の在り方を提案することである。小学校第 4 学年を対象に，合科的な単元として位置付けた防災･減災教育の授業実践の構想と実践をおこない，児童がワークシートに記述した文章や成果物，授業中に発言した内容から，目指す児童の姿に関する資質･能力が現れた児童の姿の分析をおこなった。その結果，新たな時間数の確保や単元構想するのではなく，各教科等の目標を達成しながら，防災･減災教育の 1 つの単元として合科的な単元を構想することで，それぞれの教科等の学びの中で児童が防災･減災について意識できるための学習活動の工夫に着目した研究や実践の重要性を指摘することができた。

【キ―ワード】 防災･減災教育，合科的な単元，特別活動，社会科，道徳科

1.研究の背景

国土交通白書(国土交通省 2024)からは，現在の我が国では，能登半島地震，日向灘地震等の地震が頻発するとともに，今後 30 年以内での発生確率が 80%程度と予想されている南海トラフ巨大地震等の発生も想定されることが分かる。このことから，防災･減災教育の重要性がより高まっており，学校教育活動全体で取り組むことが必要である。例えば，文部科学省(2019)が作成した「学校安全資料『生きる力』を育む学校での安全教育」では，安全教育において児童生徒等は守られるべき対象であることにとどまらず，学校教育活動全体を通じ，自らの安全を確保することのできる基礎的な資質･能力を継続的に育成していくことが求められており，自他の生命尊重の理念を基盤として，生涯にわたって健康･安全で幸福な生活を送るための基礎を培うとともに，進んで安全で安心な社会づくりに参加し貢献できるような資質･ 能力を育てることが学校教育の重要な目標の一つであるとされている。つまり，学校安全教育では，「自分で自分の命を守ることのできる児童」を育成することを目指しており，その資質･能力は，児童が自分の命を守るために必要な防災に関する知識や行動の仕方を身に付け，多様な意見や情報を基に，自ら解決方法について考え，多面的な視点をもちながら，課題解決に取り組み，防災に関する学習を自らの生活に生かそうとしている姿だといえる(小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説総則編 pp.244-245，以下「総則編」と示す)。

しかし，防災･減災教育をおこなう上ではいくつかの課題が挙げられている。例えば，柴田ら(2020)でおこなったアンケート調査では，防災･減災教育に取り組んでいないと回答したうちの 27.3%の学校が「必要だとは思うが他の教育課題などで時間が取れない」と回答しており，授業時間数の確保の難しさが分かる。また，岡田･矢守(2019)は，防災教育への期待と現場の教師が置かれた現況との間に乖離があることを取り上げ，教師が 1 からカ

リキュラムを構築し，教材研究をして，授業に臨むことには負担が大きいという点を指摘している。こういった状況では，学校外の資源を活用するといったような新たな取組みを積極的に行うことには限界があるだろう。また，清水(2023)は，小学校の防災･減災教育の中心的な役割を担っている避難訓練について，現状では教師主導の指示により避難行動をする訓練が多いが，実際には避難訓練に児童が主体的に取り組み，訓練を通して，児童が自らの行動を振り返り，改善を図ったり，防災に関わる課題を見付けたりすることが求められていると指摘をしている。

これらの課題を乗り越えるために本研究が着目した視点は，既存の教育課程を生かした合科的な単元構想･実践である。文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター(2018)では，合科的な指導について「単元又は 1 コマの時間の中で，複数の教科の目標や内容を組み合わせて，学習活動を展開するもの」と整理している。また，防災･減災を含む安全に関する教育について育成を目指す資質･能力に関する教科等の内容が関連付けて記載されている(総則編 pp. 244-245)。つまり，防災･減災教育において育成を目指す資質･能力を明確にし,その実現に向けた合科的な指導によって,既存の教育課程の目標やねらい，内容等を組み合わせて学習を展開することで，各教科等の目標を達成しながら，防災･減災教育としての指導場面を明確にすることができるとともに，時間数の確保の難しさという教師の負担を軽減することが可能になるのである。つまり，各教科等の学習と防災･減災教育を個別に実施するのではなく，教育課程において「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」という，防災･減災教育を通して育成を目指す資質･能力を「フィルター」として各教科等における防災･減災教育を捉えていくことが本研究の視点である。これを図式化したものが図 1 である。

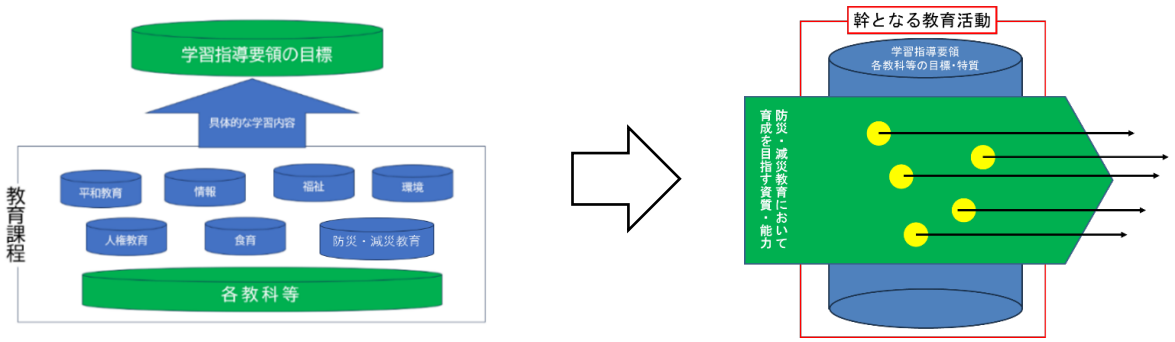


図 1 本研究における合科的な授業実践の捉え方

以上を踏まえて，本研究では，各教科等の防災･減災教育に関連する内容を合科的な単元として位置付けることで，「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」を目指した防災･減災教育実践の在り方を提案することを目的とする。

2. 研究の方法と対象

(1) 研究の方法

本研究では，次の 2 つの研究計画を立て合科的な単元として位置付けた防災･減災教育の実践を在り方について検討した。1 つ目は，合科的な単元として位置付けた防災･減災教育の授業実践の構想と実践である。具体的には,総則編 pp. 244-245 を参考にしながら防災･減災教育の視点で特に地震･津波に関連する内容を取り上げ，「自分で自分の命を守る事の

できる児童の姿を目指して」といった 1 つの単元(5 時間扱い)を合科的に構想し，特別活動，社会科，道徳科の授業実践をおこなう。2 つ目は，合科的な単元として位置付けた防災・減災教育の分析である。児童がワークシートに記述した文章や成果物，授業中に発言した内容を整理した上で，特に目指す児童の姿に近付いている姿や学びをつなげようとしている姿の分析をおこなった。

(2) 対象

本研究の研究協力校及び配属学級は，A 市立 B 小学校 4 年 C 組である。C 組の児童数は 33 名であり，学級担当は D 先生である。筆者は実習生として，202X 年度は 15 日間(学級の配属なし)，202X+1 年度は 25 日間(主に 4 年 C 組に配属)，基本的に週 1 回の実習を行い，実習以外にも自主的に参加・打合せをおこないながら実践に取り組んだ。

本研究の授業実践の分析で用いたワークシートや成果物等については，授業に参加した B 小学校の児童とその保護者から，研究データの使用及び著作者人格権を行使しないことについて同意・本報告書に掲載許可を得たもののみを使用している。

3. 合科的な単元として位置付けた防災・減災教育の構想と実践

本章では，合科的な防災・減災教育の単元構想をいかにおこなったかについて述べる。具体的には，(1)合科的な単元の構想，(2)資質・能力表の作成，(3)各教科等の指導の工夫である。

(1) 合科的な単元の構想

本研究では，B 小学校における防災・減災教育の実態を踏まえながら，合科的な単元の構想をおこなった。B 小学校では，年間 4 回の避難訓練(地震・火事，地震・津波，引き渡し訓練，不審者)や市内の訓練放送に合わせたシェイクアウト訓練をおこなっている。また，B 小学校校区の一部は，津波による浸水被害の想定区域となっており，筆者が観察した避難訓練をはじめとした防災・減災教育に関する取組みでは「大地震」「南海トラフ」の言葉が繰り返されるなど，地震と津波に対する対策を重要視していることがうかがえた。

これらの B 小学校の学校・児童の実態を踏まえながら，自分で自分の命を守る事のできる児童の育成を目指した本研究の授業実践の構想と実践をおこなった。具体的には，総則編 pp. 244-245 に記載されている防災・減災教育に関連する単元の中から特に地震・津波に関連する単元を抽出した。その際，研究協力校から事前に教育課程をいただいた上で関連する教科等について協議を重ねた。協議の結果，第 4 学年の特別活動(2)「日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」を中心として，社会科，道徳科を加えた計 5 時間の-自分で自分の命を守る事のできる児童の姿を目指して-といった合科的な単元を構想した。構想した単元の位置付けは，図 2 に示したとおりである。

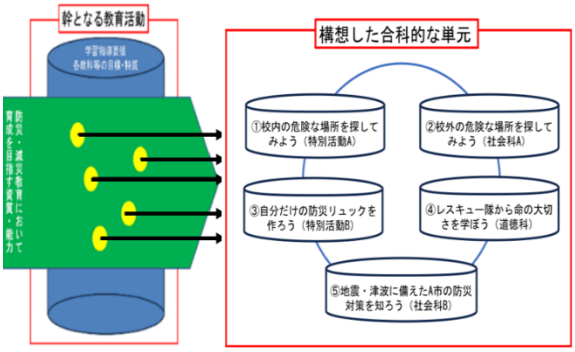


図 2 合科的な単元の構想の位置付け

(2)「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」を捉えるための資質･能力表の作成

つぎに，本研究の実践で目指す「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」を捉えるための資質･能力表の作成をおこなった(表 1)。具体的には，構想した単元内のそれぞれの教科等について，総則編 pp. 244-245 を参考にしながら授業内容に合わせて資質･能力の 3 つの柱をそれぞれ書き出した表を作成した。これらの資質･能力を踏まえると，「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」を「防災･減災教育に関連する各教科等の学習を通して，地震発生時に自分自身の命を守るために必要な防災･減災に関する知識や行動の仕方を身に付け，友達の多様な意見や資料から得た情報を基に，災害発生時に想定される困りの解決方法について自ら考え，多面的な視点をもち，他者と協働しながら課題解決に取り組み，学習した内容を今後の自らの生活に生かそうとしている」と具体的に設定できた。

表 1 「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」を捉えるための資質･能力表

教科等		知識及び技能	思考力，判断力，表現力等	学びに向かう力，人間性等
1	特別活動 A	○過去の大地震から分かる災害時の困りの改善に向けて取り組むことの意義を理解するとともに，自分の命を守るために必要な知識や行動の仕方を身に付けている。	○大地震発生時における校内の状況を「落ちてくる」「倒れてくる」等の様々な視点でとらえながら分類して、命を守るための適切な行動の在り方について，多様な意見を基に自ら意思決定できている。	○大地震発生時を想像し，自己の生活をよりよくするために，他者と粘り強く協働をしながら自らの命を守るための行動について考えたり，安全に行動したりしようとしている。
2	社会科A	○A市の大地震発生時に危険になりそうな場所について,地図を使いながらまちのつくりを調べたり，まとめたりしている。	○A市の大地震発生時に危険になりそうな場所について,地図を使いながらまちのつくりを「落ちてくる」「倒れてくる」等の様々な視点でとらえながら調べることでことができる。	○大地震発生時の困りや被害を踏まえて,日常生活をおこなう上での危険について考え，学習したことを基に自分の安全を守るために自分たちができることを考えようとしている。
3	特別活動 B	○過去の大地震から分かる課題の改善に向けて取り組むことの意義を理解するとともに，自分の命を守るために必要な準備について理解できる。	○過去の大地震から分かる災害時の困りを軽減するためにはどのような準備が必要か他者の意見を参考にしながら考えることができる。	○大地震発生時を想像し，備えを考える活動を通して，自己の生活をよりよくするために他者と協働しながら粘り強く取り組んだり，他者を尊重してよりよい人間関係を形成しようとしている。
4	道徳科	○過去の大地震発生時のレスキュー隊の働きから生命がかけがえのないものであることを知り、自他の命を尊重しようとしている。		
5	社会科B	○地域の関係機関や人々は，自然災害に対し，様々な協力をして対処してきたことや，想定される災害に対し，様々な備えをしていることを理解している。	○地域の関係機関の協力などに着目して，災害から人々を守るA市の活動を捉え，その働きについて考えている。	○大地震発生時にA市の安全を守る関係機関の働きについて予想を立てたり，学習を振り返ったり見直したりして，学習問題を追究し，解決しようとしている。
目指す児童の姿		防災･減災教育に関連する各教科等の学習を通して，大地震発生時に自分自身の命を守るために必要な防災･減災に関する知識や行動の仕方を身に付け，友達の多様な意見や資料から得た情報を基に，災害発生時に想定される困りの解決方法について自ら考え，多面的な視点をもち，他者と協働しながら課題解決に取り組み，学習した内容を今後の自らの生活に生かそうとしている。		

(3) 各教科等の学習活動の工夫

本研究で行った合科的な単元における学習活動の工夫は以下のとおりである。

① 特別活動 A「校内の危険な場所を探してみよう」(7 月 4 日実施)

地震発生時における校内の危険と思われる場所を探し考えたことや見つけたことを伝え合う活動を通して，自分で自身の命を守る方法を理解できる姿を目指した。本時では，児童が避難訓練での経験を想起しながら頭を守る事の大切さを理解できるように工夫をおこなった。

② 社会科 A「校外の危険な場所を探してみよう」(10 月 10 日実施)

タブレットの地図アプリ(Google マップ)を活用しながら校外の危険な箇所を探し，考えたことや見付けたことを伝え合う活動を通して，校外でも児童が自分の命を守る事のできる力を身に付けることを目指した。本時では，特別活動 A の学習を踏まえて，児童が校外の危険箇所を探す活動の際に前時の視点を生かせばよいことに気づくことができる授業展開を意識した。また，後に述べる「防災新聞」を授業冒頭に活用することによって.児童が学

習内容のつながりを意識しやすいように工夫をおこなった。

③ 特別活動 B「自分だけの防災リュックを作ろう」(11 月 14 日実施)

防災リュックの中には何を入れればよいのかを考える活動を設定した(資料１)。防災リュックのサンプルの写真を手掛かりにして,思考ツールであるダイヤモンドランキング(資料 3)を使い，友達の意見を基に防災リュックに入れる物を考えたり，伝え合ったりする活動を通して， 災害発生の一時避難後の数日間で必要な物について選択･判断できる姿を目指した。授業の工夫としては，地震発生時の町の様子を想像させる問いかけをおこない，児童がこれまでの学習とのつながりを意識できるようにした。

④ 道徳科「レスキュー隊から命の大切さを学ぼう」(11 月 21 日実施)

本時では，被災地の状況や被災者･レスキュー隊の人々の心情を想像する活動を通して，自他の命を大切に考える態度を目指した(資料 2)。授業の工夫としては，自分の命を守るという心情を養うために， 阪神淡路大震災の救助率を踏まえ，「自分の命は他の誰かに守られるしかないのか？」と問いかけた。

⑤ 社会科 B「地震･津波に備えた A 市の防災対策について知ろう」(11 月 28 日実施)

本時では， A 市の様々な防災･減災の取組みと自分達のおこなってきた学習との関連性を見つけることで，今後も自分に出来る防災対策は続けていこうとする態度を目指した。授業の工夫としては，これまでの学習成果をまとめた模造紙を提示することにより， 関連性を見つけやすいようにした。

〇防災新聞の掲示による学習内容の可視化

児童が学習のつながりを意識できるようにするための手立てとして， 「防災新聞」(資料 4)を作成した。防災新聞は，児童のふりかえりの内容や学習の様子や成果物をまとめた内容になっており，夏休み中に地震が起きたときの行動を考えてほしいと教師からコメントして教室に掲示した。また，社会科 A の授業実践以降の各授業実践では適宜「防災新聞」を活用しながら児童が学習のつながりを意識できるように工夫をおこなった。

4. 合科的な単元として位置付けた防災･減災教育の分析

合科的な単元(全 5 時間)の授業実践を通して，児童がワークシートに記述した文章や成果物，授業中に発言した内容の記録を整理した。そして，これらの記録から，資質･能力が現れた児童の姿を分析していく。まず，(1)では，本単元の実践を通して，各教科等で「自分で自分の命を守ることのできる児童」の姿がどのように現れたのかを整理してまとめている。次に(2)では，特に学習した内容を自覚的につなげていた児童数名の姿に着目し，分析をおこなった。

(1)本単元で現れた「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」の分析

本単元の授業実践を通して，児童がワークシートに記述した文章や成果物，授業中に発言した内容の記録を整理した。そして，児童がいかにして「自分で自分の命を守る事のできる姿」に近付くことができたのか，各場面で 3 名程度抜粋し，資質･能力の 3 つの柱で分類したものが表 2 である。

表 2 自分で自分の命を守る事のできる姿として捉えた児童の発言や記述

教科等		場面	発言・記述内容(資質・能力)
1	特別活動A	各教室の危険から頭を守る方法を話し合う活動(グループ活動での発話を記録)	・「イスがあるからこうやって(イスを頭にかぶるジェスチャーをする)頭を守れば良いんじゃない？」(思・判・表) ・「下に隠れることができないときはダンゴムシのポーズをとればいいんだよ」(思・判・表)
		「他に考えてみたい場所・今後の生活で気をつけたいこと」についてふりかえり(ワークシートへの記述)	・図書室。身の回りに危険な物がたくさんある事が分かった。これからも身の回りに気をつけていきたいと思いました。(知・技) ・机の下に隠れるだけじゃなくて,ダンゴ虫になったり,机がなかったらイスで頭を守ったりで守る方法は色々あることが分かった。(知・技) ・家に帰ったり,外に出るときは木とかが倒れたりするかもしれないから帽子をなるべくかぶるようにする。(思・判・表) ・校長室の棚が危なくて危険そうだと思った。(思・判・表)
2	社会科A	見つけたまちの危険な場所についてなぜ危険なのか発表	・「看板が落ちてくる」(思・判・表) ・「(自動車販売店名)はガラスが割れて落ちてきそう。」(思・判・表) ・「電柱がまとめて倒れてきそう。」(思・判・表)
3	特別活動B	ダイヤモンドランキングでなぜこの優先順位にしたのか理由をワークシートに記述。	・防寒が出来て体調を整える毛布。(思・判・表) ・お風呂には入れないからウエットティッシュが必要(思・判・表) ・長持ちする水や食べ物。生きるために必要。(思・判・表)
		3視点※1 についてふりかえり(ワークシートへの記述)	・スマホがあったけど壊れたら使えないからいらないと思った。(思・判・表) ・水が大切で重要だと分かった。(知・技) ・非常食とか水が必要と分かった。(知・技)
4	道徳科	3視点※1 についてふりかえり(ワークシートへの記述)	・みんなで助け合ったりしたいです。(学び) ・これからは自助だけじゃなく,協力して人の命を助けたい。(学び) ・自分達の命を守ってくることに感謝。(学び)
5	社会科B	3視点※1 についてふりかえり(ワークシートへの記述)	・今度の避難訓練は地震が来ていると思ってやる。(学び) ・避難訓練や災害発生時に役立てたい。(学び) ・避難所の場所が分かった。(自分で)命を守る取り組みをする。(学び)

※1「自分で考えたこと・分かったこと」「友達と交流して考えたこと分かったこと」「今後の生活で生かしたいこと」

ここからは，それぞれの教科等における児童の姿に着目して分析をおこなう。1 時間目の特別活動 A「校内の危険な場所を探してみよう」では， 地震発生時に命を守るための行動について避難訓練やこれまでの日常生活の経験から予想したり，行動を話し合ったりしたりする活動を通して，「倒れる」「落ちる」「割れる」等の危険探しの視点と自分の命を守るためには，その場に応じて頭を守る行動を考えることの大切さを理解できるようにするといったねらいで授業実践をおこなった。授業展開の工夫としては，避難訓練で机の下に隠れる行動の意味について児童が再考することを意識した。また， 頭を守る方法を具体的に意識できるように,「ダンゴ虫のポーズをとればいい」といった発言をした児童を指名して，実際にダンゴ虫のポーズをクラス全体に共有した。これらの授業展開を通して,「机の下に隠れるだけじゃなくて，ダンゴ虫になったり，机がなかったらイスで頭を守ったりで守る方法は色々あることが分かった。」といった地震発生時に危険から頭を守る方法を理解している児童の姿がふりかえりの記述が現れていた。

2 時間目の社会科 A「校外の危険な場所を探してみよう」では，A 市のまちのつくりや建物等を友達と話し合ったり見直したりしながら地震･津波が起きたときに危険になりそうな場所を探す活動を通して，まちの危険箇所を「落ちる」「倒れる」「割れる」の 3 視点を使って見つけることができるようにするというねらいで授業実践をおこなった。授業展開の工夫として，1 時間目の学習成果をまとめた「防災新聞」や校内の写真を授業の冒頭で提示することで，児童が前時で見つけた「落ちる」「倒れる」「割れる」の 3 視点を本時で活用できると気づき，学びをつなげることができるように工夫した。すると，児童からは「(自動車販売店名)はガラスが割れて落ちてきそう。」といった学習した視点にもとづいた発言がでてきた。このように特別活動 A から社会科 A と異なる科目であっても，前時の視点を使うことで，自分の命を自分で守るために学びをつなげて表現する児童の姿が現れていることがわかる。

3 時間目の特別活動 B「自分だけの防災リュックを作ろう」では，防災リュックの中身について，避難所の生活を想像しながらサンプルを参考にしたり，友達と中身を比較したりする活動を通して，災害時の困りに合わせて防災リュックの中身を選択･判断できるよう

にするといったねらいで授業をおこなった。学習活動の工夫として，複数の防災リュックのサンプルを提示しそれらを比較し特徴を見出すようにしたり，ダイヤモンドランキングのワークシートを用いてリュックの中身を考えたりするようにした。この工夫によって，「長持ちする水や食べ物。生きるために必要」「スマホがあったけど壊れたら使えないからいらないと思った。」といったような災害後の数日間を生き残るために必要な物はなにか選択･判断している児童の姿が現れていた。また，地震発生時には「ガラスが割れて危ない」といった発言や防災リュックの中身に優先的に上靴やスリッパ･ヘルメットを記述する児童の姿がみられた。この姿からは，前時までの特別活動 A と社会科 A で校内･校外の危険箇所を探したり，「落ちる」「倒れる」「割れる」等の視点で考えたりしてきたからこそ，その具体的な危険性を踏まえて防災リュックの中身の優先順位を考えようとする姿につながっていることがうかがえた。そして，ダイヤモンドランキングの最優先する物に「命」と記述している児童の姿もあった。防災リュックに入れる具体的な物ではないが，この児童は「自分の命を守る」といっためあてや学習のつながりを意識して，「命を守る」といった点をワークシートに記述して表現していたのではないかと捉えることもできる。

4 時間目の道徳科「レスキュー隊から命の大切さを学ぼう」では，被災地の人々の心情について想像したり，レスキュー隊の心情について友達と話し合う活動を通して，自他の生命を大切にしようとしたり，自分で自分の命を守ろうとしたりする態度を養うというねらいで授業をおこなった。授業展開の工夫としては，これまでの学習内容をふりかえったり，被災地の写真を提示したりすることにより，児童が地震発生時の被災地の状況や被災者の方々の心情を想像しやすいように工夫をおこなった。この工夫を通して，「これからは自助だけじゃなく，協力して人の命を助けたい。」といったふりかえりの記述がみられた。これは，自他の命を大切に考える態度(生命の尊重)が現れた姿であると考えられる。また，阪神淡路大震災の救助率を踏まえて，「自分の命は他の誰かに守られるしかないのか？」という発問をおこない，考える活動を取り入れた。この問に対して，児童からは「防災リュックの準備をしたい」「自分に出来ることをしたいと思った。災害が起きたらみんなで助け合おうと思った。」といったような記述があった。これは，問いを踏まえて，自他の命を大切に考え，今後も自分にできることをしていきたいと考えている児童の姿だろう。

5 時間目の社会科 B「地震･津波に備えた A 市の防災対策について知ろう」では， A 市の様々な防災･減災の取り組みについて予想をしたり，調べたりする活動を通して，自分達のおこなってきた学習との関連性を見つけ，今後も自分に出来る防災対策は続けていこうとする態度を養うというねらいで授業をおこなった。授業展開の工夫としては，これまでの避難訓練を含む学習を可視化した模造紙を作成し，授業冒頭に提示した。この際，これまで筆者が行ってきた防災･減災の授業は「自分で自分の命を守ることのできる力の育成」を目標におこなってきたことを伝えた。その後の A 市の防災･減災の取組みについて調べる活動を通して， A 市の地震･津波のハザードマップや避難情報･避難所等についての記述が児童のワークシートに見られた。中には，避難訓練と結び付けたふりかえりの記述をしている児童もいた。その児童のワークシートには，地震･津波のハザードマップや避難情報について調べた記述があり，「ハザードマップを見ればすぐに避難ができる」「警戒レベル 4 までには必ず避難しないといけない」といった記述が見られた。これらの記述内容から児童は，避難することについての防災･減災意識が高まっており，模造紙の内容から自分たちの避

難訓練との関係について考えた児童の姿がふりかえりに現れているのではないかと考えた。

このように,「自分で自分の命を守る事のできる児童」としての目指す児童の姿を具体的に設定したことで，合科的な単元における児童の姿を捉えることができた。

(2)個別の児童ごとに捉えた「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」の分析

ここからは，前節の分析を多角的に捉えるために,「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」の分析を個別の児童の学びの過程に着目してみていきたい。個別の児童ごとに本単元の授業実践におけるワークシートの記述や成果物，授業中の発言内容を整理して分析をおこなった。紙幅の関係上，ここでは5名の児童に着目し，学習した内容を自覚的につなげていたとみられる姿を記述した(表3)。

表3 個別の児童に着目した各教科等での記述内容

時間	内容/児童	場面	E	F	G	H	I
1	特別活動A	ワークシートにふりかえりを記述	図書室。身の回りに危険な物がたくさんある事が分かった。これからも身の回りに気をつけていきたいと思いました。	その場所に応じて行動などを考える。	理科室。理科室はガラスが落ちてくるかもしれないからです。	電車の中で地震が起きたらどうすれば良いのかを考えたい。	これから地震があったら今日のことを生かして,頭を守ったり,ガラスから離れたりすることに気をつける。
2	社会科A	ワークシートにふりかえりを記述	学校の中より校区の方が危険な物がたくさんあってびっくりした。気をつけないと危険だと思った。	学校以外でも危ないところがある	地震のことを良くしれたので,これからは地震に備えようと思いました。	学校じゃなくて身近にある物が危ないと思った。	学校は被害が出ても小さいけど,校区は色々な物があるし,学校の物は小さいけど校区の物は大きいから気をつけないとと思う。
3	特別活動B	ダイヤモンドランキングの優先順位の理由をワークシートに記述	私は食べ物が一番大切だと思った。	大切な物を持たないと命に関わるから。	自分の命が大切なので,ちゃんとした食べ物を入れたい。スマホがあったけど壊れたら使えないからいらない。これからも災害のことを考えたい	ゲームは欠かせない。ゲームがあればおなかすかない	水があれば手を洗える。
		ワークシートにふりかえりを記述	○君の「水を含んだ食べ物」がすごく良かった。	命を守るために必要な物が分かった。○さんの考えは家族の場所が分かるのでよかった。自分の命は自分で守らないといけないから必要な物だけ入れておく。	防災リュックをつくる。	非常食とか水が必要と分かった。これからリュックをつくってみたい。	避難所はいっぱい。毛布が良いと思った。リュックの中身を確認したい。
4	道徳科	自分の命を守るために自分にできることを考えてワークシートに記述	防災リュックの準備,避難ルートの確認				危なかったり,大変なことをみたりきいたりしたらすぐに駆けつけたい
		ワークシートにふりかえりを記述	レスキュー隊は命がけで人々を救っている。自分より人の命が大切。避難ルートの確認をする。		自分がどんなことをすれば良いのか分かった。日頃からできることはやっておく		みんなを(で)助け合ったりしたいです
5	社会科B	ワークシートにふりかえりを記述	大分市の色々な防災対策が分かった。避難所が市民ホールは驚いた。他の対策も調べたい	避難所の場所が分かった。命を守る取り組みをする。	自分の命は自分で守る。他の学習とつなげていきたい。	避難所について分かった。今度の避難訓練は地震が来ていると思ってやる。	中身は意外な物があって驚いた

① 児童E

特別活動Aと社会科Aの学びをその後の学習に生かす姿が見られた。具体的には，「落ちる」「倒れる」「割れる」という視点で身の回りや校区の様子を捉えたことで,「校区の方が危険なものがたくさんあってびっくりした。」と記述していることから，身の回りの危険な物や場所への気付きがうかがえる。そして，道徳科や社会科Bでは，避難について言及している。これは，特別活動Aと社会科Aで学んだ危険を捉える視点を踏まえて，避難についての自分の考えをもつことにつながっているのではないだろうか。

② 児童F

特別活動Bと社会科Bの学びをつなげる姿が見られた。具体的には，単元を通しためあてである「自分で自分の命を守るための備えについて考えよう」や教師の授業中の発話内容等から，命を守ることについての学習のつながりを意識していたのではないか。また，防災リュックの中身を比較する活動を通して，○さんのスマートフォンという持ち物によさを感じている。これは，自分で自分の命を守ることに加え，家族の命を守るための重要性に気付くことができたのではないか。

③ 児童 G

社会科 B では，主に A 市の避難情報について調べていたが，他にも備蓄倉庫について調べた記述もあった。これは，特別活動 B において防災リュックの中身について考える学習から，備蓄をすることの大切さに気づき，A 市の備蓄状況はどのようになっているのか関心をもち，学びをつなげている姿ではないか。そして，社会科 B のふりかえりでは，「これからは地震に備えたい。」「日ごろからできることはやっておきたい。」「他の学習とつなげていきたい。」というように，自分の命を守るために日常的にできることを考えようとしたり，学びのつながりを意識したりしている様子が現れていた。

④ 児童 H

特別活動 A と社会科 B の学びをつなげて考える姿が見られた。第 1 時のふりかえりからは，「落ちる」「倒れる「割れる」視点で地震発生時にどのように自分の命を守る行動につなげるか，自分がいる場所の範囲を広げて考えようとしている姿がみられた。そして，特別活動 A で学んだ頭の守り方や社会科 B における避難所についての学びを避難訓練に生かしたいといったような学びの成果を今後に生かそうとする姿が現れている。

⑤ 児童 I

特別活動 A では，校内の様子を「落ちる」「倒れる」「割れる」という視点で捉えたことで，特にガラスが危険だと考え，「離れる」とふりかえりに記述している。そして，特別活動 B では，防災リュックに入れるものに優先的に「上靴」と記述していた。これは，特別活動 A の学びを踏まえ，避難場面における具体的な困りを想像してリュックの中身を選択・判断できた児童の姿の現れと捉えることができる。

5. まとめと考察

本研究では，各教科等の防災・減災教育に関連する内容を合科的な単元として位置付けることで，「自分で自分の命を守ることのできる児童の姿」を目指した防災・減災教育実践の在り方を検討してきた。以下では，本研究で明らかになった点をまとめていく。

まず，本研究では，その学校の児童や地域の実態を踏まえ，防災・減災教育を通して育成を目指す資質・能力を「フィルター」として既存の教育課程を捉え直すことで，特別活動・社会科・道徳科という複数の教科の目標や内容を組み合わせた合科的な防災・減災教育の単元を既存の教育課程内で構想・実践することができた。

次に，児童がワークシートに記述した文章や成果物，授業中に発言した内容から，合科的な単元を通して行われた授業実践において，目指す児童の姿に関する資質・能力が現れた児童の姿の整理・分析をおこなうことができた。合科的な単元として「自分で自分の命を守る事のできる」めあてに基づいた学習を実現することによって，単元を通して身に付けたい力を自覚する児童の姿や学習を別の場面や日常生活に生かそうとしたりする児童の姿につながることが明らかになった。このように，防災・減災教育に関する資質・能力を整理し，見取る視点として設定した上で分析をおこなったことで，児童の姿を教師から捉えることができた点が本研究の意義の一つである。

以上の結果を踏まえると，新たな時間数の確保や単元構想するのではなく，各教科等の目標を達成しながら，防災・減災教育の 1 つの単元として合科的な単元を構想することで，それぞれの教科等の学びの中で児童が防災・減災について意識できるための学習活動の工

夫に着目した研究や実践の重要性を指摘することができた。防災･減災教育については，学校の児童や地域の実態を踏まえた上で，合科的に自分で自分の命を守るために必要な力を育成していく実践の可能性を見出すことができた。

しかし，本研究の限界や課題もある。本研究では研究協力校の教育課程や児童の実態を踏まえながら，配属学級の授業を数回担当する形で実施を行った。しかし，合科的な単元構想や授業実践をより効果的におこなうためには，授業者が年間の教育課程を俯瞰しつつ，各授業等の実施時期や関連性の調整をすることや日々の継続的な児童との関わりが重要であろう。また，教師が児童のふりかえりや成果物を意図的に全体共有する場面を増やすことで，児童が各授業のつながりについての理解をより深めることができるように工夫する必要があると考えられる。

さらに，評価の面でも課題が残る。本研究では，合科的な単元の実践を通して目指す児童の姿にどの程度近づいたのかを資質･能力表に基づいて評価をしてきたが，合科的な指導を行う上では，各教科等のねらいを達成できたのかの見取りや評価を行うことも重要であった。この点について本研究では十分に検討できていない。この課題を解決するためには，教師が児童の姿を見取る場面を多面的に設定する必要があると考える。具体的には，実際に教壇に立った際に，避難訓練等の学校行事を含めた合科的な単元を構想していきたいと考えている。

今後も本研究で得られた成果や課題を土台としながら，授業実践を積み重ね研究を発展させていきたい。

引用･参考文献

･岡田夏美，矢守克也(2019)学校防災教育を規定する 4 つのフレームワークに関する評価 ークロスカリキュラム化をめざして- 自然災害科学 38-2 241-256

･国土交通省(2024)国土交通白書 2024 令和６年版 サンワ

･柴田真裕，田中綾子，舩木伸江，前林清和(2020)わが国の学校における防災教育の現状と課題－全国規模アンケート調査の結果をもとに 防災教育学研究 1-1 19-30

･清水秀夫(2023) 小学校における防災教育の提案 ―避難訓練と総合的な学習の時間の関連を図って 共立女子大学家政学部紀要 69 137-143

･文部科学省(2019)学校安全資料『生きる力』を育む学校での安全教育 東京書籍

･文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター(2018)発達や学びをつなぐスタートカリキュラムースタートカリキュラム導入・実践の手引き 学事出版

資料１　特別活動Ｂ　指導案

本時案(3 時間目)
(1)題目　「自分だけの防災リュックを作ろう！」
(2)　本時のねらい
　防災リュックの中身について,避難所の生活を想像しながらサンプルを参考にしたり,友達と中身を比較したりする活動を通して，災害時の困りに合わせて防災リュックの中身を選択･判断できるようにする。
(3)展開

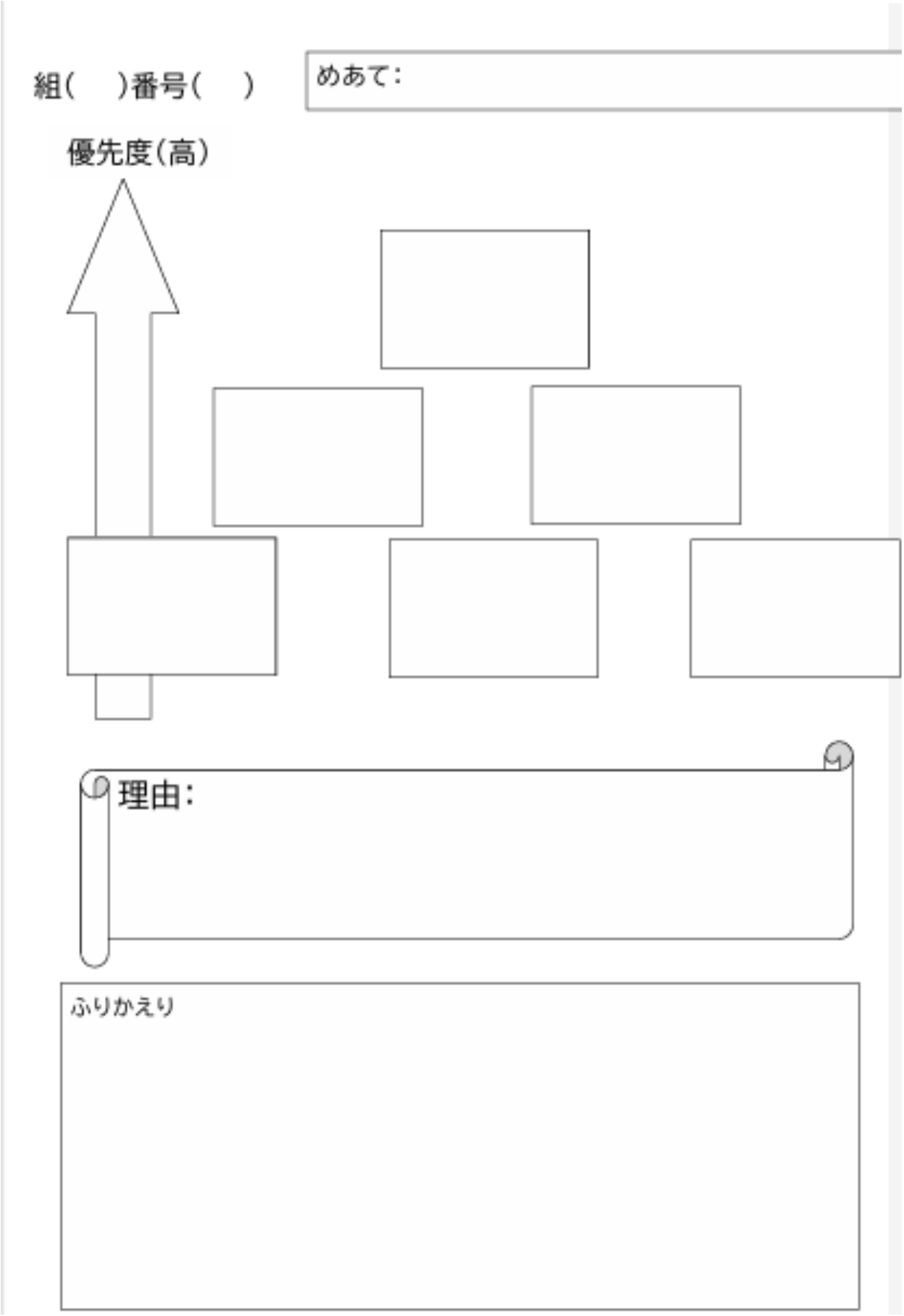
時間	主な学習活動･内容	教師の指導･支援	備考(評価等)
2	1．成果物から既習内容をふりかえる。	○学校内の危険と校区の危険について調べたことを確認しながら地震発生後に目を向けさせる。	
5	2．避難所ではどのような困りがありそうか写真から考える。	○条件設定を行う。(冬の寒い時期に避難所で三日間過ごす。) 考えられる困りについては板書を行う。	
3	3．防災リュックについて知る(確認する)。その後,めあてを確認する。	○防災リュックについて写真を見て理解を深めながら,「家庭では作っているか？」等の問いかけをしながらめあてを確認する。	
	めあて：大きなゆれの地震から命を守るための備えである防災リュックについて考えよう。		
10	4．防災リュックの中身について他校の５年生が用意したリュックの中身の写真を手掛かりにする。	◎教師は児童の発言を板書する。 この際，なぜ防災リュックにそれが入っているのか理由について問いかける。	災害時の困りに合わせて防災リュックの中身を選択・判断できている。 (ワークシート記述) (発言)
20	5．自分だけの防災リュックの中身と理由をダイヤモンドランキングで考え,共有までおこなう。	◎中身の６つの優先順位を決める。この際，手掛かり以外にも必要だと考えたものは入れて良いことを伝える。 ○写真を映し出して理由を尋ねる。その後，中身の順位が異なる児童に聞いていく。	
5	6．ふりかえりをおこなう。	○ふりかえりの後に教師が話をする。「優先順位はおうちの人と話すと変わっていくかもね。話してみてね。」と伝える。	

資料２　道徳科　指導案

本時案(4 時間目)
(1)題目　「レスキュー隊から命について学ぼう」
(2)本時のねらい
　被災地の人々の心情について想像したり，レスキュー隊の心情について友達と話し合う活動を通して，自他の生命を大切にしようとしたり，自分で自分の命を守ろうとしたりする態度を養う。
(3)展開

時間	主な学習活動・内容	教師の指導・支援	備考(評価等)
5	１.命を助ける仕事について社会科の学習を思い出しながらめあての確認をする。	○地震発生時の町の様子の写真を見せてめあてを確認する。 その後,「こんな状況で人々の命を守る仕事にはどのようなものがあるのだろう？」と教科書は開かずに問いかけ発言を板書する。 ◎児童が社会科の学習内容を想起できるようにする。	
		めあて：レスキュー隊から命について学ぼう	
15	2. 「レスキュー隊」を読む。その後,被災地の人々の心情について考える。	○教師が本文を範読する。 ※能登半島はマグニチュード 7.6 であったことに触れる。 発問①「ゆれの大きな地震の余震が続く中，被災地にいる人たちはどんな気持ちなのだろう？ 」 〈予想される回答〉 ・被害にあうかもしれない(怖い)・・・① ・早く誰か助けて(助けて)・・・② ◎被災地に乗り込むレスキュー隊お想像する活動につなげる。	
10	3. レスキュー隊の心情について自分と友達の両方の考えを踏まえる。その後,まとめをおこなう。	発問②「レスキュー隊の人は，なぜ「命がけ」で人々の命を救っているのだろうか。」 ○個人 3 分，ペア 3 分で考える。 その後，指名をする。 〈予想される回答〉 ・仕事だから(義務感) ・命は一つしかない大切なもの(生命の尊重) ・助けた人や家族の笑顔が見たい(やりがい)	自他の生命を大切にしようとしている。 (ワークシート記述) (発言)
10	4. 自分の命を守るためにできることを考える。	発問③「自分の命は他の誰かに守られるしかないのか？」 ◎社会科の阪神淡路大震災の救助率を踏まえる。 全体共有の時間をとる。	自他の生命を大切にしようとしたり， 自分で自分の命を守ろうとしたりしている。 (ワークシート記述)
5	5. ふりかえりをおこなう。	「じ・と・こ」のふりかえりをおこなう。 ※じ…自分が分かったこと・考えたこと 　と…友達の考えから分かったこと 　こ…今後にいかしたいこと)	

資料３　特別活動Ｂで用いたダイヤモンドランキングのワークシート



資料４　児童のふりかえりの内容や学習の様子や成果物をまとめた「防災新聞」

防災新聞

大分大学
教職大学院
岩崎凌大

地震が起きたときはどんな行動をする？

大きな揺れの地震が突然起きた時には，とにかく頭を守ることを考えよう。教室にいるときには，避難訓練で学んだように机の下にもぐって頭を守ろう。でも、地震はいつ起きるか分からないし、その時みんなはどこにいるか分からない。

今回の授業では、突然地震が起きたときに備えて、学校内のどこが危なくなるのかを四カ所の写真を使って考えました。

活動に使った写真

活動で使用した
校内の写真

活動で使った写真の１つです。
いっぱい〇がつきました

[redacted]のみんなは、「落ちてくる」かもしれない。「倒れてくる」かもしれない。「割れる」かもしれない。この三つのことが危ないと発見しました。そして、この危ない物がたくさんある場所でも、[redacted]のみんなは「ダンゴムシのポーズを取る」「危ない物には近づかない」「外に逃げる」「机やイスの下に隠れる」「イスを頭にかぶる」など色々な頭の守り方を考えました。

これから夏休みに入りますが、[redacted]のみんなにはどこかに出かけたときにも「もし今、地震が起きたら私はこうしよう」と考えるようになってほしいなと思ってます。

活動の様子

活動の様子の
写真

危険な場所を話し合って
〇をつけていきました

【ふりかえりから】

みんなの今回の授業で学んだことや、今後気をつけたいと考えたことを紹介します。

・ダンゴムシになったり，椅子で頭を守ったりで守る方法は色々あることが分かった。
・家でも避難訓練をすればいい。
・外に出て身を守る。
・図書室に危ない物が多そう。
・電車の中で地震が起きたらどうすればいいのか考えてみたい。
・町はきけんがいっぱいだから気をつけて歩く。

【岩崎先生から】

これから自分がどうしたいかを書いてくれてて先生はとても嬉しかったです。夏休みの間にも気になったことを調べたり、家で訓練をしたらまた岩崎先生に教えてください。

真剣な表情で災害時の行動について考えています

真剣に考えている
様子の写真

授業中の様子